

我が立命館バレー人生を振り返って

前監督 為山誠司

まずは何よりも四回生、卒部おめでとう。四年間よく最後まで頑張りました。色々な出来事や葛藤などもあったと思いますが、4年間続けて来てくれたことを嬉しく思います。

さて今回は私も四回生と同様に、生涯二度目のバレーボール部を卒部する立場なので、最後にあたって、自身の立命館でのバレー人生を振り返ってみたいと思う。

今回の全日本インカレ初戦の相手は、2021年の全日本インカレ初戦でも対戦した国士館大であった。当時は、本学の方がディフェンスやサーブ力で勝っており、フルセットで勝利した相手であった。しかし、今回は相手のディフェンス力が高く、サーブも強く、結局試合はストレートで敗れた。監督生活最後の試合で、本学が長年大切かつ重要にしてきたディフェンス力で彼我の差が現れ、「最後の最後で、ディフェンスで差があったな。だから辞め時ということなんだな」という率直な感想を持った。

振り返ると立命館大学バレーボール部との最初の出会い

は、1983年に立命館大学経済学部に入學した直後、かなりの意を決して衣笠キャンパスの第一体育館2階に行き、フロアに居た女子マネージャーの方に、入部を申し込んだ時だった。

兵庫県神戸市の夢野台高校という無名校でありつつも、県協会の事務局が設置されているという少し特徴的な高校でバレーをしていた自分にとって、スポーツ推薦入試が無いながらも当時、関西1部リーグに所属していた立命館大学バレーボール部は驚きかつ憧れの存在だった。

入部後直ぐに関西春季リーグ戦が始まり、右も左も何も分からないまま怒涛の日々が進んでいった。

当時の立命館のバレー部は、森脇先生（理工学部教授・保健体育）がバレー部OBでもあり部長兼監督で、先生は、猛烈かつ長時間練習が当たり前の指導であった。今では考えられないが、練習オフの日もチームでは一切決まっておらず、全て森脇先生の胸先三寸、判断次第という形であった。象徴的だったのが、入部後直ぐに始まった関西春季リーグ戦で、試合に向けた調整練習などは全く無くいつも全力練習。土日のリーグ戦の試合後にも休みは無く、入部後の最初のオフは、確か一カ月以上経った5月の連休の時で、かつ僅か一日だった。

たと記憶している。

当時の関西1部リーグ戦は6大学で構成されており、大商大・天理大・大体大・同志社・立命館・京産大が居た。その中でも、大商大が1970年から12年以上にわたって春秋とも連続優勝をしており、完全なる1強時代であった。

なお、この関西1部6校の中でスポーツ推薦入試が無いのは立命館だけであった。リーグ戦は、同一大学と土日に関連し、それを総当たりで5週間実施し、最終順位を決めるものであった。5位と6位は2部との入替戦に臨まないといけない形式で、下位チームにとっては常に降格の影が気になるかなりシビアなものであった。

立命館は、他大学の様にスポーツ推薦入試で身長や能力の高い選手が入って来るわけではないので、部員の卒業による代替わりの度にチーム力は上下し、かなり不安定なものであった。高校時代に全国大会に出場した経験のある者はほとんど居らず、本当本物の雑草集団であった。

当時の森脇先生がよく言われていたことを今も覚えてい

る。「お前たちは他の1部所属の大学の選手が高校時代にやり遂げて来た強度の練習をやって来ていない。また強豪校の

選手のような極度に緊張感が漂う全国大会の覇権を争うような熾烈な試合の経験も無い。だから、大学生の今になって、激しい練習をやることで他大学と勝負出来る力を身に着けさせようとしているのだ」ということであった。

そのような森脇先生の方針であったので、試合に負けた後、会場校の部員が片づけをやっているところを尻目に横のコートを借りて、激しいレシーブ練習を行うことなど当たり前で、他大学からは「また立命のレシーブ練習が始まった」とよく揶揄されていた。

その様に今から振り返れば考えられない程の勝負への拘りの厳しさや練習量の多さであったが、1部の他大学との選手との身長差や能力の開きはどうしようもなく存在し、1部ではいつも負けが続いて、2部との入替戦の常連であった。それでも毎回入替戦だけはかろうじて勝って1部残留を決めるという形が入学後3シーズンも続いた。しかし、2回生の秋季リーグ戦では先に2セットを奪いながら、相手に3セット連取され、とうとう入替戦にも敗れて2部に降格することとなった。

降格後も練習は常に激しいものであったが、結果が思うように得られず、当然のごとくそれに耐えられない部員は続出

し、どんどん部員が減っていく状況でもあった。私の同期でも入学時は12名居たが、4年後の引退時には5名にまで減っていた。他の学年も同様なものであった。

その後、猛練習は続くも、1部復帰は果たせないまま、自身の大学四年間の現役引退を迎えた。

自身の卒業後の進路は、アシックスやミズノなどのスポーツ関連の企業を考えていた。森脇先生からはいくつかの女子実業団チームのコーチの話を紹介されていたが、女子のチームに関わることは全く興味がなく、お断りをさせて頂いていた。スポーツ関連企業への就職活動は順調に進み、このままバレーからは完全に離れるのかなあと何となく考えていた時に、森脇先生から立命館大学の職員募集の話を頂いた。大学で職員として働きながら、コーチとして後輩達を指導出来るという話を聞いて、それまでの方針を変更し、直ぐにその道を選ぶことにした。翌年の1987年からスポーツ選抜入試が開始されることが決まっていたことも、立命館への就職の後押しになった。

当時森脇先生からは、「為ちゃんは職員になるので教員のワシとは違うから、若い間の10年ぐらいコーチをやっても

らって、その間にワシの次の教員を入れる様にするから」と言われていて、自身もそのつもりでコーチになった。

1987年に就職して森脇先生のもとでコーチとなった。正直なところ、私は科学的トレーニングや、効率的な練習を現役時代から指向していたので、従来から森脇先生の練習のやり方や強化方針とは異なる方向性ではあった。しかし、監督である森脇先生の意向に逆らって勝手なことは出来ないもので、森脇先生の大まかな方針は堅持しながら、具体的なコーチングの面でコーチとしてのアレンジを行い部員とは接していた。

日々練習の際に行われる森脇先生の部員への厳しい叱責指導に対して、あとで本人を呼んで私から違う言葉で説明し、監督と部員との溝を最小限にする様に務めていた。それでも、あの頃は私の職場に毎日の様に、森脇先生の指導方針に、不満を言いに来る部員が存在した。それをあれこれとなだめすかしてガス抜きをし、練習に再び行かせることが日常でもあった。

当時平日の練習は、午後3時開始で午後6時終了であった。午後6時からフロアで夜間主の体育の授業があるので必ず6時には終えないといけなかった。当時は長時間か

つ激しい練習であったが、授業のある平日の練習は、後ろの時間が決まっているのでコーチとしてもありがたかった。

職員の当時の勤務時間は午前8時半から午後4時半までであったので、終業したら急いで第一体育館に行き、部員も使うボックスで着替えて練習に参加した。森脇先生はもちろん練習の最初からフロアに顔を出しており、私が途中参加したフロアには毎回ピーンと張り詰めた雰囲気は漂っていた。特にコーチとなって最初の三年間は、チームは1部復帰を目標指して悪戦苦闘の毎日だった。

1部との入替戦は、コーチ二年目の秋季と三年目の春季と二回連続で進出したが、いずれも1部チームの壁に弾き返されて昇格は出来なかった。日々の猛練習を続けて来た結果がこの連続の昇格失敗ということ、このショックはチームにとってもコーチの自身にとっても大きく、これ以上何をしたら1部に上がれるのかと正直思った。また当時の四回生は自身が現役の主将時代の一回生だった代で、何とか結果を残させて卒業させてやりたいとも思っていた。

しかし、この四回生達は春の入替戦の敗戦を受けて自ら立ち上がった。四回生として最後の秋のリーグ戦が始まると、

下宿している四回生は自主的に朝の7時半に体育館に来て朝練を行い、通いの四回生は昼休みに体育館に来て昼練を行い、そして夕方通常練習は全員揃ってと、平日3部練を行っていった。コーチの自身も始業前に朝練、夕方練では一緒に汗を流した。四回生のそんな姿を見ていた下回生も徐々に朝練や昼練に参加する様になり、チームの結束は徐々に高まっていった。

そうして迎えたコーチ三年目の秋の1部との入替戦、対戦相手は大院大であった。森脇先生は、前日に四回生と相談し、その試合のスタメンにあまりリーグ戦で出場経験のない一回生エースの横川（川西明峰卒）を起用し、二回生のレギュラーエースの坂下（花園卒）をベンチに控えさせた。そうして始まった入替戦は、第1セット、第2セットを善戦しながらも大院大に奪われた。ああ、万事休すかと思ったところで、第3セットからはベンチに控えさせていた二回生エースの坂下をスタメンで投入し、その坂下が獅子奮迅の働きをして、第3、第4、そして第5セットを連取して、大逆転で大院大を下し1部復帰を決めた。

試合後、森脇先生になぜ最初から坂下を使わなかったのかと聞いた時、「あいつは能力はあるけど、ムラがあるか

ら、極限まで焦らして焦らして、ここぞという時に出したらきつと爆発すると思ったから」と言われた。こんな大事な試合で、そんな大胆な采配が出来るのかと心底驚いたことを覚えてる。

1部に復帰した後は、それまでの伝統の猛練習に加えて、スポーツ選抜入試で良い選手が入って来る様になっていたので、直ぐに1部の上位に手が届く様になった。自分達が出来までやって来たことが間違いではなかったことを実感した。

1部に戻っても、相変わらず日々の練習は激しく厳しいものであったが、こういう厳しい状況の練習ではあったが、あの頃の練習には自身の楽しみもあった。自分がスパイクを打つことと、練習最後のAB戦にBチーム側のセッターとしてレギュラーチームと戦うことであった。元々自身は低身長ながらサイドスパイカーであったので、セッターを本格的にやりだしたのはコーチになってからだだったが、直ぐにセッターの面白さに憑りつかれ、自分のトスで控えのスパイカー陣を操って、レギュラーに勝つことが毎日の練習での大きなモチベーションとなっていた。自分自身でもこの時期に自身のスキルやパフォーマンスが高まったことを実感していて、その

後の指導に大いに役に立った。そういうことを自由にやらせてくれていた森脇先生には感謝している。

あと、コーチとして歩みを始めたこの時期に高いスキルを持った選手と出会えたこともその後の自身の指導の核となった。

スパイカーで言えば、玉段(市尼卒)と西村晃一(花園卒)、セッターは山本隆康(市尼卒)である。

玉段は身長180cm、最高到達点が315cmと、全く高さが無いにも関わらず、ブロックの無いコースへの強打やブロックアウトやフェイントが巧みで関西リーグのスパイク賞も獲得した凄腕選手であった。西村は、花園高校時代に全国優勝し、鳴り物入りで入部してきた。ちょうど玉段が4回生の時の1回生だった。西村も身長173cmと小兵に関わらず、最高到達点330cmと高いジャンプ力と素早い身のこなし、的確なコース打ちで、これまた関西でスパイク賞を獲得した。二人とも特にライトからクロスへのスパイクのキレが良く、この二人がチームに居た時代は、まぎれもなく国内トップのライトスパイカーが立命館に存在した時代であった。

セッターの山本隆康は、先の玉段と同期で幼少から二人でコンビを組んでいたこともあり、ラリー時のこの二人の阿吽

の呼吸での攻撃は凄かった。ノーサインで声だけでコンビを合わせる事が出来るのは驚きであった。この山本は、4回生の最後の全日本インカレを前にした中央大との定期戦で大活躍を見せ、観戦していた当時VリーグのNKK（日本鋼管）の嶋岡監督が「是非、今から進路を変更してNKKに来てください」とその日に勧誘されるといふ出来事もあった。

指導者として駆け出しの時期に、この様な素晴らしい能力を持った選手と一緒に活動出来たのは、その後の指導者としての各プレーの良し悪しの見定めにおいて、大いなる判断基準を得たと思っている。その意味で彼らとの出会いは、掛け替えのないものであった。

コーチを10年間行い、1997年に森脇先生から引き継ぐ形で監督となった。実は正確には、その前年の夏に本学で行われた中央大学との定期戦終了時に森脇先生に呼ばれ、この秋から自分は今もう試合に行かないから、実質的には代理監督としてチームの采配をふるう様に指示された。その頃には、最初コーチになる時に森脇先生に言われていた「10年コーチをやったら職員として仕事中心に戻って・・・」云々の話はどうに立ち消えになっており、今の状況では、自身が監督を継

ぐしかないのだなと覚悟をした。なお、部員や内外関係者にはその事実は伏せておくこととし、その年の全日本インカレが終わってから、監督交代を公表することになった。

監督交代を行った際、森脇先生はコーチとしてチームに残り高校生リクルートを担当されることと、1997年の8月末に行われるバレーボール部創部50周年記念事業を森脇先生主導で行うこととなった。

監督となり、森脇先生との新たな二人三脚体制も軌道に乗って順調に進んでいた矢先に、衝撃のあの事件が起こった。

7月1日、その日は夕方に、森脇先生がリクルートされたスポーツ推薦入試の受験予定選手を、学生部に報告するための会議に森脇先生と二人で出席した。その会議は無事終了した。

その翌日から広島で西日本インカレが開催されることになっていたので、私は明日広島に出発、森脇先生は授業の関係で数日遅れて参加されるとのことと、会議後に第一体育館前で「では、広島で」と言って森脇先生と別れた。これが生前の森脇先生との最後の会話となるとは思ってもみなかった。

自宅に戻り夕食・入浴も済ませ、そろそろ就寝しようかと

思った頃、大学から緊急電話があった。森脇先生が学内に駐車している自身の車の中で倒れられていて、急遽、救急車で近隣の病院に担ぎ込まれたとのことだった。急いで妻とともに森脇先生が運ばれた病院に行ったが既に森脇先生の意識は無く、脳卒中による昏睡状態だった。つい数時間前まで一緒に居たのと思うと呆然となった。

そして、その三日後、治療の甲斐なく森脇先生はそのまま旅立たれた。私を含めAチームは広島で西日本インカレの最中にこの訃報を聞き、部員一同、悲しみにくれながらも大会準優勝まで上り詰めた。当時の部員達の底力を見た大会であった。また広島には行かず大学で待機していたBチームのメンバーは、森脇先生の葬儀に出席した。

森脇先生が突然他界されたことで、森脇先生が携わっておられた高校生のリクルート、あと一カ月半後に開催が迫っている創部50周年記念事業が大きく自分に押し掛かって来た。全てが手探りで、生前の森脇先生が行っておられたことを一つずつ調べ、これからやらねばならないことを洗い出して直ぐに着手していくという、途方もない作業が待っていた。今思えば、自分のそれまでの人生の中で最大級な試練であった。

幸いこの試練は、多くの方々のご尽力とご協力によって何とか乗り切ることが出来た。森脇先生が声を掛けていたリクルート対象者の受験生と顧問の先生には全て連絡が付き、予定通り出願してもらうことが適った。また創部50周年記念事業も様々な状況を切り抜けて、最後は無事終了することが出来た。全てが片付いた瞬間、思わず安堵の涙をこぼしたのを覚えている。

森脇先生を亡くし、コーチも居ない一人きりの監督となり、全てのことを自身の裁量と判断のみで実行出来る立場となった。真っ先に行ったことは、ウェイトトレーニングや器械体操系トレーニング等を利用した身体能力の基盤作りと、フロアでのスキル練習の融合であった。自身がこれら両方を実践していて、当時年齢が30代前半になっても現役時代よりも格段に能力が向上した経験を実感していたので、これらを部員達に実践していくことは迷い無く行えた。

森脇先生時代からの激しい練習による伝統のレシーブ力と粘り強いプレースタイルの土台があり、そこに自身の新しい実践を加えることが出来たため、スポーツ選抜入試により、高校での実績もあり能力も高い選手が継続的に獲得出来る

様になると、一気に立命館は強豪校の仲間入りを果たす様になっていった。

1995年には西日本インカレ初制覇と、毎回負け続けていた中央大学との定期戦初勝利。1997年の創部50周年記念事業の中での中央大学との定期戦でも再び中央大学に勝利をおさめる等、目に見える形で順調に強化が進んでいた。

また当時は、近郊の実業団チームに練習マッチに出かけることも多く、社会人バレーでは2部にあたる実業団リーグレベルのチームにはほぼ勝ち越し、トップのVリーグチームとの対戦でも、サントリーや新日鉄（現堺ブレイザーズ）に練習マッチや合宿に行かせてもらった場合、相手チームに助っ人外国人が入らない若手主体であれば、互角以上の試合展開が出来る程になっていた。相手チームの監督さんから「うちの若手達の刺激になるので、是非もつとつと練習試合に来てください」と依頼される様な力関係でもあった。全日本インカレでも度々関東1部の強豪校を倒し、大会の台風の目になることもよくあった。

それでもなかなかバレーボール部創部以来の悲願であるお膝元の関西制覇は果たすことが出来ず、忸怩たる思いを続けていた。

1990年代当時の関西1部の状況は、私の現役時代の遙か前から続いていた大商大盛時代が漸く終わりを告げ、天理大が安定して上位に位置し、そこに大商大卒でVリーグの象印プレーヤーとして活躍した新進の光山氏が新たに監督して率いる近畿大が、一気に優勝争いに加わって来た時代だった。特に近畿大は留学生を含む高身長選手を揃えた国内でもまれにみる大型チームで編成されており、徐々に中小型チームの立命館を含む他チームの脅威になりつつあった。

そんな中、監督となって初めて自身がリクルートして集めた選手が四回生となった2002年の関西春季リーグ戦に、関西制覇のチャンスが訪れた。中村主将（直方卒）率いるメンバー達である。リーグ戦は開幕戦から7連勝とし、8戦目で大商大に一敗したものの、再び巻き直して残りの試合を全勝し、創部以来初の関西制覇を果たした。全OBGが待ち望んだ関西優勝である。優勝が決まった後の歓喜の胴上げの際、宙に舞いながら「ようやくここまで来れたな」と、万感の思いであった。

実は、この時に優勝して初めて理解したことがひとつあった。なかなか優勝出来ない間は、自身の中で優勝というものを特別視しており、優勝とは何か特別な条件が揃わないと出

来ないものの様に思い込んでいたことである。

しかし、この時の優勝で、優勝には特別なことは何も必要ではなく、優勝するに足る力をチームが身に着けていたら、優勝は普通に達成出来るものだと言うことが分かった。今から言えば至極当たり前のことであるが、関西での優勝を実際に自身が経験してみても、この真理に気づけたことが自身の後々の指導にも生きて来るようになった。

当時の自身の状況は、2001年には初めて北京・ユニバーシアードの全日本男子ユニバチームのスタッフとなり、国内のトップ選手や世界のバレーの状況を肌で知ることが出来、貴重な情報や経験を得ることが出来た。

2003年にも再びテグ・ユニバーシアードにスタッフとして帯同し、全日本男子ユニバチームは、強豪国との競り合いに勝ち、世界第2位の銀メダルを獲得した。当時、長年低迷を続けていた日本の男子バレー界に、面目躍如の一石を投じる結果となった。この二度のユニバに帯同した時の選手達は、その後のオリンピックや世界大会で活躍し、現在は指導者として奮闘している面々も多く、今でも交流が続いているのは嬉しい限りである。

また、この頃から西日本の指導者は学連の垣根を越えての

交流が活発となり、「東西対抗戦」の復活を期に、新たな大学生の強化策が模索されていくこととなった。

従来の大学バレー界で強化策と言った場合は、関東1部のトップ選手が選抜され、西日本からは1名か2名がお情けで選出される様な状態が続いていた。

しかし、北京とテグの二大会の全日本ユニバチームの指揮を執った東亜大学の佐幸先生を中心に、従来の大学生の強化体制を見直し、真に大学日本代表チームのメンバーとしてふさわしい選手を選考していく形を目指していく様になった。

西日本の場合は手始めに、毎年2月末の時期に「西日本強化合宿」を開催することとなった。私はこの合宿の立ち上げ時から事務局長を長年にわたり務めていくことになる。

この「西日本強化合宿」の特筆すべきところは、代表選考に繋がる合宿であるにも関わらず、指導者も学生も合宿参加費用を各自負担しての開催であったことである。これは、全日本学連や西日本学連で正式に合宿開催の予算が付かなくてもそれで諦めず、必要な強化策は自分たちの手弁当でも実施していこうという西日本の先生方の強い意志の表れでもあった。

そのため、参加選手の選考でも、従来の様な高い身体能力

を持つ選手だけでなく、この合宿への参加に対し強い参加意思を持つ者も参加対象とした。また指導者の参加に際しても、各学連の強化委員などの役職者でなくても、合宿での指導に強い意欲を持つ者には無条件に門戸を開き参加を許可した。参加選手・指導者ともガチンコ意欲の強化合宿が実現した。

この冬の「西日本強化合宿」、夏の各学連選抜チームによる「西日本5学連選抜対抗戦」を経て、最終的に12月の「大東対抗戦」の西日本選抜チームのメンバーやスタッフが決まる流れが出来上がった。このことは、大学バレー界の活性化のために大いなる成果をもたらした。

またこの「西日本強化合宿」では、学生の中から将来の指導者を育成していく仕組みも、私の発案で途中から盛り込んだ。それは「指導補助学生」という制度で、将来指導者を目指す学生の合宿への参加者を募って、実際に合宿の中で指導者の補助を果たしながら、指導の実際を勉強・経験してもらうものである。うちの植田コーチや、高知工科大監督の合田氏、東亜大監督の小林氏などもこの指導補助学生出身者であり、将来の指導者の発掘・育成を実現させた取り組みでもあった。

先述の全日本ユニバでの経験、西日本を中心とした意欲的

な取り組みの実践を経て、私の指導者としての力量や経験も高まっていき、そこに能力の高い選手のリクルートが成功したこともあり、チームの力も向上していった。

それが最高に結実したのが2007年であった。セッターで主将の松嶋（市尼卒）を中心に、エース野々村（安来卒）、リベロ湯野（東北卒）によるディフェンス力とバックアタックを多用したプレースタイルで戦った関西春季リーグ戦は、開幕からどんどん連勝を続け、結局、最終戦まで一度も負けることの無い10連勝で2002年の初優勝以来の二度目の関西制覇を果たした。

その後、自身が関西選抜チームの監督にもなり、立命館の優勝メンバーを主力に置いたチームで、夏の西日本5学連選抜対抗戦でも関西選抜チームは優勝した。関西秋季リーグ戦では、前半の取りこぼしや怪我人等もあり、春秋連続優勝は適わなかったが、その年最後の全日本インカレでは立命館はまさしく台風の目となった。

全国ベスト8を掛けて、第1シードで当時既に全日本メンバーに選出されていた大エース福澤君擁する中央大学と対戦し3-1で勝利。これが創部以来、公式戦で中央大に勝利した初めてのことであった。

続く準々決勝でも慶應大に3・1で勝利し、創部史上初めての全国ベスト4に躍進した。ただ残念だったのは、主将でチームの柱であるセッターの松嶋が、先の中央大戦で福澤君のバックアタックのボールがブロック時に目に当たり、その夜の医師の診断で網膜剥離の疑いがあり、残る試合を欠場せざるを得なくなったことだ。全日本インカレ終了後、幸いなことに松嶋の目は大事なく回復し、ひと安心ではあったが、今でも、この時に松嶋が負傷欠場することなく、最後まで残りの試合に出場出来ていたらと思うことがある。

翌2008年も正月にあった天皇杯でJTと対戦し1セットを奪う健闘を見せ、関西リーグでは優勝争いを演じ、全日本インカレでもベスト8と、なかなか良い成績で終わったが、思えばこれ以降特筆すべき成績は残せない年が続いた。

原因としてあげられるのは、この数年前から職員としての業務が多忙を極め、日々の練習は学生の運営に任せ、土日祝や長期休暇での指導を余儀なくされていたことだ。様々な工夫をして、学生とのコミュニケーションは、はかっていたつもりであったが、やはり、以前に比べると学生との接触機会が少なくなり、自身と学生との関係性も薄れてしまった様に感じられた。

また自身の後任者と予定していた当時のコーチが家庭の事情でコーチを降りることとなり、再び自身ひとりでチームを切り盛りしていかねばならなくなったことも、しんどい状況であった。

今思えば当時の状況は、自身が次の人間にチームの指揮をバトンタッチしたくても出来ない、そんな状況であった。職員としての業務量も職責も重くなる中、伝統あるこのチームを潰さないためには、自身が出来る範囲でのチーム運営や強化を行っていくしかなく、その様な状況では、チームの運営は、維持が精いっぱい留まっていた。

学生は四年間で卒業し、毎年代替わりしていく。その様な宿命を持つ大学スポーツでは、どんな伝統校も年ごとに変化はあるものである。立命館バレーが長年大切にしてきたディフェンス力も例外ではなかった。自身が気が付かないまま、いつのまにかうちのチームからディフェンス面での優位性が消えていった。相手の攻撃を拾えないチームでは相手の得点可能性が増加し、こちらの攻撃機会は減少し、勝利の可能性が減ってしまうのは自明の理である。

そんな状況が続く中であったが、チームにとって少し明るい変化があった。2015年の植田コーチ（大商大附卒）の就任と、

時を同じくして実施されたバレー部の衣笠からOICへの練習拠点の移転である。植田コーチが誕生し、現場指導を複数体制で行える様になり、二人で相談しながらチーム運営を行える様になった。また衣笠時代はフロアを複数のクラブでシェアせざるを得なかったため、練習の時間的な制約なども多かったが、OICではフロア1面はバレー部が専有的に利用することが出来る等、チーム強化にとってプラス材料が増えた。

また私も、指導者として経験と年齢を重ねたことにより、ほとんどの高校の強豪校の監督の先生方よりも年上となる状態となり、選手のリクルートは以前より行い易くなっていった。お陰でリクルートの面では、数年に一度は全国大会で活躍した強豪校の有力選手を入部させることが出来る様になり、その点ではチーム強化は実績を挙げていた。

その様に植田コーチと二人体制でチーム強化を模索していた頃、2020年にあのコロナ禍が発生した。この年は前年から世界的に流行の兆しが見えていた新型コロナの猛威がどうとう国内にも影響を及ぼして来た年であった。3月下旬の愛大院大合宿の参加中止を皮切りに、関西春季リーグ戦・西日本インカレが中止となり、結局、前半期の公式戦は全て中止となった。バレー部の練習も4月には自粛が決まり、学生も私

たち指導者も日々の活動が何もない状況となった。

中学生でバレーボールを始めてから、長期間、練習も試合も何も無い状況というのは全く初めてのことで、なかなか慣れない状況だった。

結局、夏頃には少し国内の感染状況も落ち着きを見せたため、関西秋季リーグ戦は、十月から規模と日程を縮小して開催することとなり、バレー部の練習も恐る恐る8月中旬から再開した。

このコロナ禍という外圧による強制的な活動自粛期間を経験したことは、自身の中でそれまでのバレーボール観に大きな影響を与えた。

ほぼ4カ月間の全く練習が無い期間を経たが、自粛期間中も個々人のトレーニングをしっかりと継続出来た場合は、フロアでのパフォーマンスを戻すのに、思っていた程の困難さは無いことが分かった。逆に長年酷使してきた身体の故障個所が、練習が無いことによって良い方に改善した者も何人か居た。

それまで毎日の様にバレーボールの練習をすることに何の疑問も持たなかったが、果たして今までは、本当に必要かつ効果があることをしてきたのか、あらためて必要な練習の

頻度と内容を見つめ直す機会にもなった。

あともう一つこのコロナ禍で自身の頭の中に巡ったことは、学生スポーツの「主人公」は誰だろうということであった。自身は指導者として監督という立場に居る。一つでも多く勝ちたい、負けたくない、優勝したいと考えており、過去からそのことをもの凄く大事にして来た。勝てば周囲から指導者としての手腕に評価を受け、自身の満足度や自己肯定感も得られる。そのため、チームの指導に情熱を掛け、生活の大部分をバレーボールに費やすことが重要かつ必要なことと考えてきた。いわば自らの人生を掛けると言っても大げさな事ではなかった。

しかし、コロナ禍で長期に活動を自粛せざるを得なくなり、指導者として指導する対象そのものが目の前から居なくなる現実を見た時、これまでの自身が持っていた指導者としての実績への拘りに大きな変化が生まれた。

それは、学生スポーツの「主人公」は学生であって指導者ではないということの理解である。これは至極当たり前のことなのであるが、このことを、自身は長年にわたり正しく理解出来ていなかったのではないかと思った。

自身が指導者の活動に人生を掛けるという覚悟を持つことを言い訳に、学生の自己実現の機会を、自身の自己実現の機会に無理やり変換してきたのではないか、とも思い至った。いわば他人の舞台の上で、自身が勝手に描いた役柄を演じようとしているのではないかということである。

その様な考えに立って再度学生スポーツに目を向けてみると、自身が学生スポーツで「主人公」でありえたのは、立命館大学で現役大学生だった4年間だけであり、これはもうとづくに終了していることに気が付いた。

今はチームの監督という立場であったとしても、実際に活動をする部員達がそこでは「主人公」なのであって、監督である私ではないこと。

大学チームの指導者としてすべきことは、彼ら彼女らが自身で立てた目標に対して、それが達成可能となるように活動の援助を行うことや、それらの活動を経験する中で人生を切り開いて行く力を身につけさせること、そのために指導者として学生に寄り添い、サポートをすることだということである。

もちろん学生が「主人公」であったとしても、その学生が活動を通じて成長することが大学の教育機関では必要なも

のであるため、目標設定のレベルを含め、全てを学生の判断任せにするのではなく、彼ら彼女らがより高みに挑める様に適宜指導者側がより高いものを提示し、そこへ挑戦出来る様に背中を押してあげることが必要なのである。

コロナ禍を契機にはあるが、指導者としての晩年を迎えて、何とかこの様な考えに到達出来て本当に良かったと思う。その意味では学生スポーツに長年携わることが出来たお陰で、自身も成長することが出来たのだと思う。

この様に考える様になって自身の指導スタイルも大きく変化した。

部員からの各種連絡への対応や、日々の練習の組み立てや内容は、植田コーチの担う範囲に変更し彼に任せた。それまでは何でも自分でやらなければ落ち着かず、気が済まないタイプだったので、人に何かを任せるのは大きな冒険であった。またこの様に部員とのやり取りを植田コーチに任せる様にしたのは、数年以内に実現せねばならない「監督交代」を意識してのものであったことも事実である。

また試合においては、以前は監督席から声を張り上げ、あるいはコート近くに飛び出し、メンバーへの指示をガンガン飛ばし、チームを鼓舞し続けるスタイルだったが、コロナ禍

以降は、チームを情熱を持って励ますことは変わらないものの、監督席にずっと座って指示することはしない様にした。新たに監督席を離れて控えメンバーが居るゾーン近くに立つ様にしたのである。

そうすることで、試合中に控えメンバーとコミュニケーションを取りながら、采配を振るうことが可能となった。それまでは試合中控えメンバーと話す機会もなく、彼らが試合中に何を考えているかもわからず、ただ、コート上のレギュラーメンバーのパフォーマンスを見ているだけであったが、この様に控えメンバーの近くに居ることにより、控えメンバーならではの考えや、控えメンバーの試合へのモチベーションやウォーミングアップの状態なども把握することが可能となった。これは自身の中では大きな変化であった。

この様にコロナ禍での様々な環境の変化がきっかけになり、自身の指導スタイルや考え方が変化したのは、ある意味喜ばしいことであった。ただ自身が選択したこのやり方が、学生スポーツの指導者にとって汎用的に正しいものかどうかは毛頭ない。学生スポーツの指導は、それぞれの組織の置かれている状況や、属しているメンバーの素養や属性・性格などによって絶えず変化するものである。その時々

やその場面場面で、学生への対処の内容は違ってくる。言うならば全ての場面で学生に対しては一人ひとり異なる、オーダーメイドの指導が必要になってくるのだと思う。

自身のこれまでを振り返ってみても、「あの時もつこう声を掛ければ良かった」、「あの指導は効果が出なかった」、「あいつにはこう言ってあげればもっと理解してくれたかも知れない」等々、反省し思い返すことしきりである。

また自身の元々の性格は、他人に対して強く指導したり、激しく叱ったり、集団の先頭を自身がぐいぐい引っ張っていかうというタイプではなく、本来の自分は、他人に出来るだけ交わらず、他人から自分に関わられることを嫌がり、自分のペースで自分の道を進んでいくことが好きな人間である。

ただ、現役時代の4回生時の主将の時も、就職してコーチになった時も、その後チームのトップである監督になった時も、それぞれに求められる「役」を理解し、それを演じて来た毎日だったと思う。

この様に書くと、私のコーチ時代や監督の初期の頃に私と一緒に活動をともにしたOBOG達は、為山さんは「役」であんなに激しく時には厳しく我々を指導していたのか、と驚く者が多数だと思われるが、その通り、実際には私は指導者という

「役」を演じて来たのである。それも長年かなりの無理をしながら今日まで。

大学バレーの指導者となって丸39年経った。ここまで長くやるつもりも予定も、自身の中には元々無かったことだ。ただ、人生においてはこの様に、自分の思い描いていたものとは異なる形になることもよくあるのだと思う。大切なのは、その時々で自身に与えられた機会を逃さず、知らない世界にでもチャレンジしていくことだと思える。チャレンジすれば何らかの結果が出る。その結果を見て、また次に歩み出せば良いのだと思う。その様な人生で良かったと感じている。

さて、ようやくここで、「役」を降り、舞台からも降りて、元の素の自分に返ることとなる。

ここまで長い間、この「役」を与え続けてくれた大学バレーと部員達にとっても感謝している。この「役」無しには多くの学生との出会いも、自身の成長も経験の蓄積も無かったと思う。とても充実した39年間でした。

ありがとうございました。

最後に、植田新監督率いる立命館大学体育会バレーボール

部の今後の更なる発展を祈るとともに、二人三脚でここまで歩いて来たわが妻、美紀の献身に感謝しつつ、長い筆を置きたいと思う。

どうもありがとう。これからもよろしく。

立命館大学バレーボール部

前監督 為山 誠司